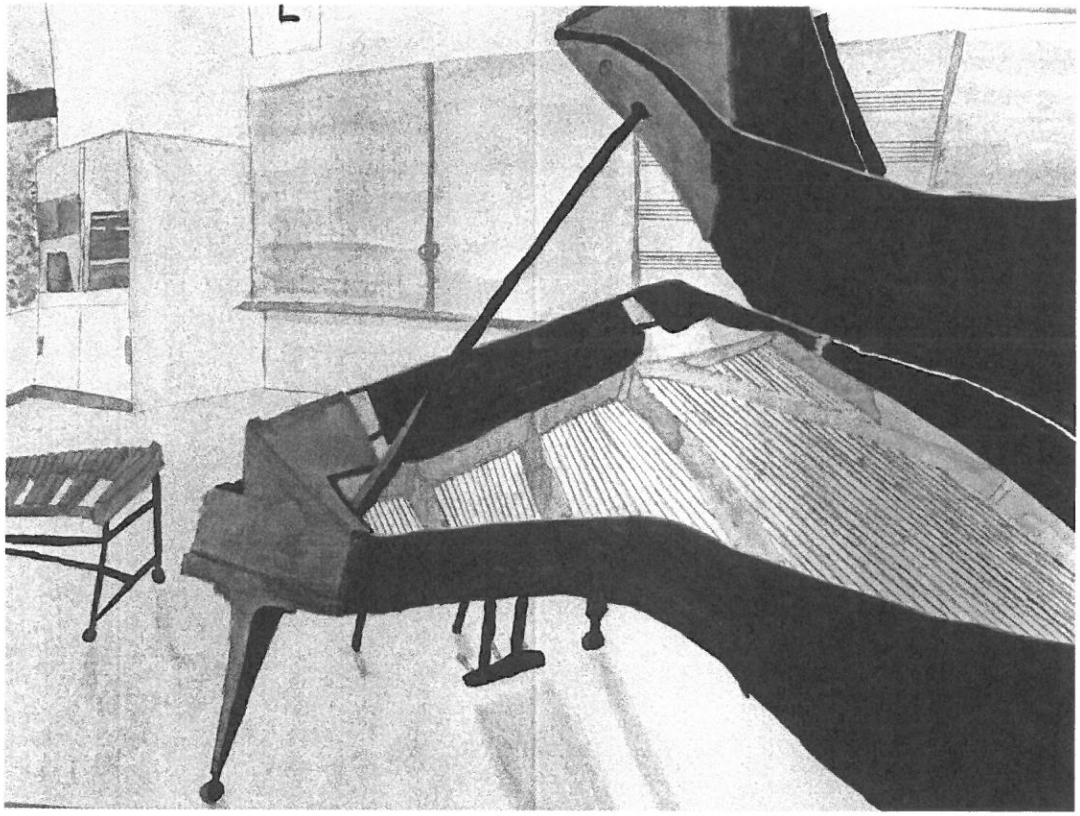
下郷町小中学校児童生徒作文集

ふじの実

第34集



下郷町四つ葉のクローバープラン推進会議編

発刊に寄せて　～子どもの頃の読書活動は、豊かな人生への第一歩～

下郷町四つ葉のクローバープラン推進会議会長（下郷中学校長）　小　林　稔

はじめに、今年度も下郷町小中学校児童生徒作文集「ふじの実」（第三十四集）を皆様にお届けすることができますことを嬉しく思います。

今年度の「ふじの実」も町内の子どもたちの素晴らしい作品が数多く収められています。皆様とともに、それぞれの作品から感動を味わえることに感謝します。

ところで、「子どもの読書活動の推進に係る法律第2条」には、「子どもの読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことができないもの」と定義され、また、国立青少年教育振興機構が実施した「子どもの生活力に関する実態調査」（平成27年）では、「読書をすることが多い子どもほど、コミュニケーションスキルや礼儀・マナースキルが高い傾向にある。」さらに、子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究では「子どもの頃に読書活動が多い成人ほど、『未来志向』『社会性』『関心・意欲』『自己肯定』『文化的作法・教養』『市民性』の全てにおいて、現在の意識・能力が高い。特に、就学前から小学校低学年までの『家族から昔話を聞いたこと』『本や絵本の読み聞かせをしてもらったこと』『絵本を読んでもらったこと』などの読書活動は、成人の『文化的作法・教養』との関係が強い」と結果づけ、この報告書のサブタイトルには、「子どもの頃の読書活動は、豊かな人生への第一歩」とも書かれているほど読書活動の重要性を提唱しています。

本町でも、本年5月に青少年育成町民会議において「下郷町豊かな心育成の町宣言」の中に「読書活動の推進」を掲げ、毎月第3日曜日を「家庭読書の日」と定め、「家読」（うちどく）を推奨しています。家族みんなで本を読み、コミュニケーションづくりを進めていこうという取組みになります。

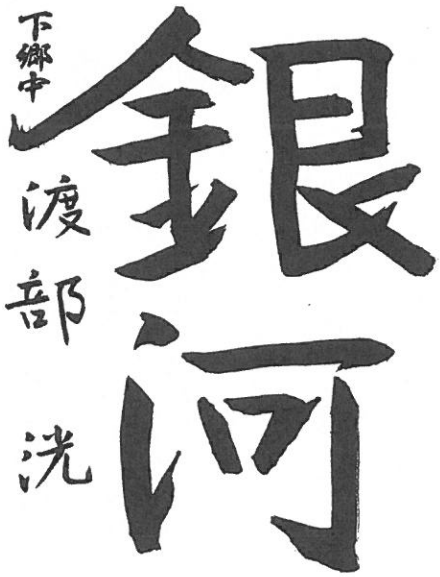
是非、それぞれの御家庭において、「家読」を推進していただき、「本」を通した親子のコミュニケーションづくりに役立てていただきたいと思います。近々、ご家族それぞれが読んでみたい本を探しに、図書館や本屋さんを訪れてはいかがでしょうか。

最後に、ここまで児童生徒を指導していただいた先生方に深く感謝申し上げるとともに、御支援いただいた下郷町教育委員会並びに多くの関係各位に心より御礼申し上げます。

下郷中学校

手の塑像
「オリジナルの印相をつくろう」

習字　「銀　河」



習字　「銀　河」

3年　佐藤　由梨さん

手の塑像
「オリジナルの印相をつくろう」

3年　渡部　洸くん

目　次

一、最近の勉強法　一年　長沼志保　61

二、「8分音符のプレリュード」を読んで（県佳作）　二年　星　葵　62

三、柔道を通して学んだこと　二年　星　朱乃　64

四、出会いに感謝　三年　玉川かれん　66

五、これからを担う私達　税の作文コンクール　東北地区納税貯蓄組合連合会長賞　三年　白川順姫　68

六、「君の膵臓をたべたい」を読んで（入選）　三年　渡部愁羽　69

最近の勉強法

一年　長沼志保

皆さんは、授業中、どのような方法で学習していますか。最近の学習方法は以前と少し変わってきているようです。

私がおもしろい授業だなと感じたのは、小学校での算数の授業です。

その日の課題は「（－5）＋（＋8）の答えはなぜ3になるのか」というものでした。簡単に計算はできても、なぜ3か、と聞かれると説明に困ってしまいました。私は、まず、ノートに数直線を書きました。真ん中に0、左は－右は＋。－5の場所を確認し、そこからプラス8なので、数直線で右に8ずらす。そうすると、その場所がプラス3になるので、答えはプラス3になる、という説明を考えました。そのあと、班の人で話し合ってみると、同じような考えでした。

最近は「答を出す」だけではなく、「なぜそうなるのかを説明する」という学習に代わってきたようです。自分で予想したり、考えをまとめ話し合うという授業が多くなってきました。

私は、このような学習方法の、メリットは何かを考えてみました。

一つ目は、自分とは違う考え方を知ることができる点です。このことは自分の考え方を広げてくれます。自分では思いもつかなかった考え方を友達から指摘されることもあります。

二つ目は、友達のいいところを知ることができる点です。「この人はたくさん知識があるなあ。」「あの人は説得力のある説明をするなあ。」「口数は多くないけど、しっかり自分の意見をもっているなあ。」など、今まで知らなかった友達の一面を見つけることができます。

三つ目は、説明したり、説明されたり、教えたり、教えられりして、理解が深まることです。学んだことの定着の度合いを表すラーニングピラミッドというものがあるそうです。「講義」だけでは5％の定着率ですが、「他の人に教える」学習方法では、90％まで定着率があがるそうです。このことで、わからないままで授業が進んでしまうことを防ぐことができます。自分があいまいな理解をしていると、友達に説明することができません。お互いに良い影響があると感じました。

しかし、課題もあるようです。

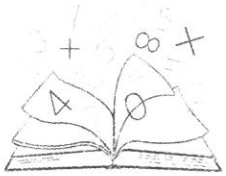
このような学習をするには、話し合いのための表現力や知識が必要だということです。ニュースに関心を持つこと、本を読んで語彙を増やすこと、いろいろな体験をしていることなど、広い知識と経験がなければ話し合いが充実しないと思います。また、自分がどうすればいいかわからないとき、すぐに人に聞いてしまう人にとっては、とっても楽な学習になってしまう可能性があります。さらに、中学校では、学習内容によって、みんなで話し合ったり説明しあったりする時間をとることは大変なのかもしれません。

いくつかの課題もありますが、私は、以前の学習方法より、

最近進められている学習法のほうがやる気が出てくるように思います。知識を得るだけでなく、自分の考えを持ち、その考えを説明できるようにして、学習を進めていきたいと思います。そして、学ぶことが楽しいと思えるようにしていきたいと思います。

評　授業の進め方が変わってきたことを敏感に感じとっていますね。ニュースを聞いたり、家族に尋ねたりして情報を集め、根拠を示しながら意見を書いている点が良いですね。

長谷川　陽子



「8分音符のプレリュード」を読んで

二年　星　葵

「8分音符」。その言葉を見ると、どうしても嫌になる。私は吹奏楽部に所属していて楽器をやるのだが、8分音符はそこそこ吹きづらいので、嫌なのだ。友人が無我夢中で読んでいるのに、すぐに自分も読もうという気にならなかったのもそのせいかもしれない。しかし、読んでから、嫌だった気持ちは全部好きに覆り、どうしてもっと早く読まなかったんだろうととても後悔した。

この作品は、世話焼きで優等生な果南が、指の怪我でピアノを弾くことをやめた元天才ピアニストで、かつ美少女という羨まれるようなものを持ちながら、無愛想で素っ気ない態度をとる転校生の透子に出会うところから始まる。

透子という圧倒的な存在にかき乱されていく果南だが、自分が所属する吹奏楽部の演奏を透子に指導してもらったのをきっかけに仲が深まっていく。

「主人公が吹奏楽部の設定」「タイトルに音楽用語がある」ことから、読む前までは部活のシーンが中心となったストーリーだと思っていた。しかし、読んでみると違った。この物語はあくまでも果南と透子の友情をテーマに置いていると私は思う。音楽も二人を繋いだ重要な橋の役割をしている。音楽と一緒に紡がれていく二人の友情と心情。その始めから終わりまでを、

果南視点で描いている。

透子と果南、私はどっちと似ているか考えたとき、自分では果南に似ていると思った。読んでいて、何回も果南に共感できたからである。

果南は、いわば優等生で、周囲からは「いい子ぶってる」「先生にひいきされてる」などと嫌味こもった言葉を向けられている。果南は意図的にそう振舞っているのだと。果南自身、ほめられたい気持ちはあるからと認めていて、反論ができない。そんな気持ちがすんなり理解できた。私も似たようなもので、周囲からは真面目、優等生などとしばしば言われることがあるからだ。そして、そう言われると、きまって何分かは考え込んでしまう。私は、周りから演じているように見えているのかな、と。無論、演じている訳ではない。だから、そんなことないよと否定したくなる。しかし、それが完全に自然な立ち振るまいかどうか聞かれたら、すんなり肯定できる自信はない。心のどこかで、誰かから良く思われて、ほめてもらいたい自分がいるからである。否定したいけど、あながち間違いではない。人にも伝えにくいこの感情。それを果南も抱えていて、自分と似ているなと思った。私は架空の人物に自己投影できないことが多いのに、果南にはすんなり自己投影できてしまい、読みやすかった。

でも、自分が果南の立場だったら、すぐに無愛想な透子と仲良くなることなんか諦めていたと思う。果南は作中でよく自分を「凡人」だと卑下する。事実、天才で人間味があまりない透子に対して、果南は良くも悪くも人間くさい。それでも私は、透子とは違うけど、同じくらい素晴らしい才能を果南は持っていると思う。果南は、吹奏楽部の活動を当初は見下していた透子に、タクト（指揮棒）を握らせて、指揮をとってもらうまでにさせたのだ。「透子にタクトを握らせた」。これも十分才能である。才能というと、何かの腕が優れている、実力があることを言うのが一般的だが、たとえそれが一人の人間に限定されるものであっても、それは才能だと思う。

透子も、素っ気なく接していたのに、クラスで果南が先生の指輪を盗んだという疑惑がかかった時は、間接的に果南を助けるような行動をとっていて、かっこいい。見返りを求めないで自然に助ける姿を学びたいと思った。

二人の友情と共に紡がれてきた音楽も、終わりに差しかかった頃、透子は作曲のコンクールで史上最年少入賞を果たす。それが自信となり、ドイツへ転校することになる。

透子は最後、果南に自分が作曲した曲を渡す。曲名は「美しき春へのプレリュード」。別れの曲でもあり、始まりの曲でもある。プレリュードとは、前奏曲のことを指す。二人の音楽はここで終わりではなく、まだ始まったばかりだった。曲にはいつか終わりがある。けれども、楽譜の終止線が終わりではない。そこには余韻がある。たとえ終わりが来ようとも、果南と透子にはお互いのことが、いつまでも心に鳴り響いてることだろう。

別々の道を歩むことになっても、そこで関係が終わる訳ではない。この本を読み終えて、このことを、強く感じた。今、学

校生活を共にしている友人達とは、いつかそれぞれの道を歩むことになるけれども、それが私達の関係の終りではない。ゴールが新しいスタートでもあると、今感じる。

「8分音符」。私はこの言葉があまり嫌ではなくなった。長いようで短い果南と透子の物語、そして私達の楽しかった一日みたいでどこか愛しく、大切に思えるからだ。

㊥ 自分自身の体験やその時の気持ちを重ね合わせて書いていますね。書き出しの文章と最後の文章が、対応する内容になっているところの表現も工夫されていますね。　長谷川　陽子

柔道を通して学んだこと

二年　星　朱乃

皆さんは柔道と聞いてどんなことを思い浮かべますか。投げられて痛そう、危険、怖いといったイメージを持つ人が多いのではないでしょうか。

私が柔道を始めたのは、小学三年生の時です。友達から誘われ、なんとなく始めた柔道でしたが、長いこと続けていくうちに、少しずつ柔道に対する思いが変わっていきました。

私達柔道部は、スポーツ少年団も含め、現在八人で活動しています。少人数でありながらも、互いの技の向上をめざし、日々練習に励んでいます。大会では、自分の投げ技が決まり、勝利することもうれしいですが、仲間が勝つ瞬間に立ち会えるのも自分のことのように感動を覚えます。ですが、勝つというのは、そうたやすいことではありません。小学生のころの私は、県大会で何度も負けては泣いての繰り返しでした。強くなるには厳しい練習と向き合っていかなければなりません。

中一の中体連県大会は、周りが年上の選手ばかりでおじけづき、勝ちたい気持ちよりも不安ばかりが大きくなっていきました。それでもなんとか気持ちを奮い立たせ、激戦を勝ち抜き、迎えた決勝戦。対戦相手は、去年県大会で優勝している三年生の強敵でした。私は必死に技をかけ続けました。どれくらい時間が経過したでしょう。そのうちの一つの技が相手の足にひっ

かかり、ようやく倒すことができたのです。審判の「一本」という声が響き、静まり返った会場が一気に沸いた瞬間を、今でも鮮明に覚えています。また、あの時の私は、ここにたどりつくまでの辛さ・悔しさも吹き飛び、うれしさと共にやりきったという満足感でいっぱいでした。

そしていよいよ各都道府県から勝ち抜いた選手が集う全国大会の日を迎えました。大きな大きな会場は、たくさんの人で埋め尽くされ、私はこれまでにない緊張に襲われました。絶対一回戦を突破したい、勝ちたい、その一心で畳の上に私は立ちました。しかし、柔道はそう甘くはありませんでした。相手の技の速さに対応できず、自分の柔道ができないまま敗れてしまいました。ようやくこの大舞台に立てたのに、たくさんの人に応援してもらったのにと、私はただ泣くことしかできませんでした。その後、悔しい思いを抱きながら他の試合を観戦すると、技の数が多い人、切れのある技を持っている人がたくさんいることに驚かされ、自分の未熟さを痛感しました。そして、「絶対に全国でも戦える選手になりたい」そう心に誓っていました。

次に待ち構える大会は中体連新人戦でした。しかし、それからの私は大きな壁にぶつかることとなりました。周りからの期待の言葉がプレッシャーとなり、大会に出ることも、人に投げられることにも恐怖を感じるようになったのです。「もっと自分から技をかけろ」「頭を下げるな」と先生に注意されながらも、思うようにできず空回りのとても苦しい時期が続きました。それでも、大会がある日は、忙しい仕事を休んで見に来てくれる父、朝早く起きて準備を手伝ってくれる母、私の気持ちをくんで励ましてくれる家族が大きな支えとなり、再び前に進むことができました。また、仕事で疲れていても一生懸命指導してくださる先生方や、厳しい練習を一緒に乗り越えてきた仲間がいてくれたからこそ、今の自分があるのだと思っています。他にも思いがけないところでたくさんの方々に応援していただいたことも決して忘れません。

私の目指す柔道は、自分から果敢に攻め、一本勝ちをする柔道です。日々、たくさんの人への感謝の気持ちを忘れず、これからも仲間と一緒にたくさん汗を流し、より強い相手に立ち向かっていきたい、そう強く思います。

㊥ 柔道を続ける中で経験した勝つことの難しさ、諦めずに努力することの大切さ、周囲の人への感謝の気持ち等が伝わってきます。朱乃さんの芯の強さや思いやりの心は、柔道で培われたものでもあったのですね。　野中　ゆみ

出会いに感謝

三年　玉川　かれん

皆さんにとって「出会い」とはどんなものでしょうか？皆さんは今までたくさんの人と出会い、その人たちに支えられて生きてきました。そのひとつひとつの出会いには意味があると思います。

十五年前、私はここ下郷町に生まれました。下郷町は、大内宿や湯野上温泉、観音沼といった多くの観光名所があり、春には町中を彩る沢山の桜が、夏には新緑に染まった壮大な自然が、秋には思わず目を奪われるような美しい紅葉が、冬にはうっすらと雪化粧した山々が、観光客を出迎えてくれます。そんな下郷町で生まれ育った私は沢山の人に出会いました。私を大切に思い、愛してくれる家族、同じ目標に向かって共に戦ってくれる仲間、大好きな友人たち、私に大きな夢を与えてくれた人、数え切れないくらい沢山の出会いがありました。その中でも特に忘れられない大切な出会いを皆さんにご紹介したいと思います。

まず一つ目は、私に「教師」という夢を与えてくれた菊地省三先生との出会いです。小学生の時、当時の担任の先生から菊池先生について色々なお話を聞いたり、学校で講演をして頂いたりして、どんな先生なのかとても気になって自分なりに調べていたことを今でも思い出します。菊池先生は特に「話すこと」「聞くこと」の指導を徹底され、子供の健全な発達や人間形成上にも言葉によるコミュニケーションができることは非常に大切なことだという考え方を持たれています。私自身、自分の意見を相手に伝えたいのにうまく伝えられないことが多くありましたが、授業の中に話し合い活動や討論会など自分たちでコミュニケーションや意見を言い合う場が沢山あったおかげで、今では伝えたい内容をしっかりまとめて自分の言葉で相手に伝えることが出来るようになりました。また、菊地先生の子供たちを沢山「褒める」、どんな些細なことでも素晴らしいことだと思ったら「褒める」というやり方にもとても興味がわきました。人は何歳になっても褒められたらとても嬉しくて自然と笑顔になれます。「褒める」ということは人を幸せにしてしまう魔法なのです。菊池先生との出会いから私と同じようにコミュニケーションのとり方で悩んでいる子供たちの手助けをしたい、私が菊池先生から大きな夢を与えてもらったように出会った全ての子供たちに将来への希望と幸せを与えられるようになりたい、そう強く思うようになりました。菊池先生との出会いがなければ私は教師という職業を目指していなかったと思います。そう思うと出会えたことは奇跡なのです。私はこの出会いを大切にし、教師という高く大きな目標に向かって一生懸命頑張っていきたいと思います。

二つ目は、三年生のみんなとの出会いです。みんなと出会ったのは三年前。緊張しながらもこれから始まる新しい生活に期

待で胸がいっぱいだったことを昨日のことのように思い出します。振り返ると楽しいことも苦しいこともたくさんあった三年間でしたが、私はこの学年でみんなと出会えて本当によかったと心から思えます。五月に行われた校内陸上大会。個人の種目に本気で取り組むのは勿論のこと、学年関係なく声を枯らして応援する姿、長縄跳びで何回失敗しても声を掛け合い「勝ちたい」という一心で必死に跳び続ける姿、勝っても負けても笑顔でお互いを称えあえる姿、最高学年としてのあるべき姿を見せられた素晴らしい大会だったと思います。中学生になってみんなと出会い、一人一人に何か変化があったと思います。お互いに認め合いいい刺激をもらったことで成長できたのではないでしょうか。

今年の三年生の学年目標は、本気の力と書いて「本気力(しゃかりき)」です。最後の中体連大会、これから待ち受ける受験、そして中学校生活最後の一年を本気で頑張って充実した年にしたい、そう強く思います。

私は三年生の皆さんと出会ったことで、何事にも積極的に取り組むことができるようになったと思います。何をするにも「めんどくさい」「恥ずかしい」という言葉で終わらせていた私が、自ら生徒会活動や特設部の活動に取り込めるようになったのは、失敗を恐れずに、がむしゃらに頑張っている皆さんとの出会いがあったからです。この出会いのおかげで、次のステップへ進む土台ができたように感じます。進学や就職で必要になってくる、積極性や表現力、辛いことも乗り越える力、人を信じる力、などたくさんの力が着いてきたと思います。

私は、この二つの大きな出会いから、人と出会うことの大切さ、良い出会いがあれば人は変われるということを教えてもらいました。私たちの人生はこれからが長いです。今、この時間を共に過ごしている大好きな友人たち、先生方がいます。しかし、必ず別れの時がやってきます。辛く、悲しい別れを乗り越えた先に、新しい場所で新しい仲間たちとの素敵な出会いが待っていることでしょう。ぜひ、その出会いを大切にしてください。これから出会うすべての人に「出会ってくれてありがとう」という気持ちを忘れないでください。出会いそれはあなたを変えてくれる素敵な魔法です。

私が、この主張を通して、皆さんに伝えたかったこと。それは「どんな出会いであろうと、それを大切に思えば、必ず自分に変化がある」ということです。

皆さんのこれからの人生に素敵な出会いがあることを願っています。

㊟ 自分が今あるのは多くの人との「出会い」にあることを実感し、文章にしましたね。過去を振り返りながら、現在、そして未来に対しての考え強く伝わってくる文章です。

長谷川　陽子

これからを担う私達

三年　白川順姫

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

私はこの作文を書くにあたって、教科書の裏表紙を改めて見た。一冊一冊にこの言葉が書いてあった。そして0円の金額。ふり返ると小学一年生から九年間、当たり前のように何気なく使っていたように思う。「無償」という言葉さえ希薄に感じられていた。義務教育が終わろうとしている今、税金について考えてみたいと思う。

私は驚きのデータを見つけた。「公立中学校の生徒一人当たり年間教育費の税金の負担額」なんと、約百万円を超えるというのだ。小学生は一人当たり年間約八十八万円。義務教育九年間で、合計約八百三十万円の計算になる。教科書ばかりでなく、教育施設の建設、机や椅子などの備品、教材代、いろいろなものに税金が使われていることに気がついた。

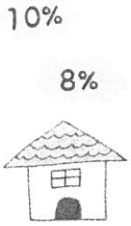
では、日本の税金の仕組みはどうなっているのだろうか。私は普段から百円ショップを利用している。確かに品物は百円だが、会計になると百八円になる。百円に対して八円、八パーセントの消費税。ということは、私達中学生も間接的とはいえ、税金を支払っていることになる。すなわちすでに納税者なのである。たとえそれが少しの金額でも、自分が支払った税金が、もしかしたら教科書代にあてられているのかもしれないと考えると、今までよりも教科書を大切に使いたいと思った。令和元年十月から、消費税は十パーセントに引き上げられる。しかし軽減税率制度も設けられ、飲食料品や新聞が対象となる。生活をする上で必須となるものは八パーセントのままだと知り、少し安心することができた。私達は税金の意味と使い道を理解し、これからを受け入れていく必要があると思う。

消費税の他に、私達にこれから深く身近な税金になるものの一つに所得税が挙げられる。これは個人の所得、利益に対してかかる税金で、毎年確定申告して納税する。給料や利益が多くなればなるほど段階的に税率が高くなる方法、累進課税が導入されている税金で、私達が働き出したら、必ず支払わなければならない直接税の一つである。そして、日本の税収の内訳の中

でも多くの割合を占めている税金なのだ。今、人口が減少していく中で、もし働き手までもが減ったとしたら、一番問題視されるのではないかと私は考える。日本の財政を家計に例えてみる。働いて得た給料を上手に使わないと、家計は大変になる。それと同じように、国民から集めた税金を大切に上手に使ってもらうことが、私達の願いだ。

義務教育もあとわずか。働き出したら、私達には勤労と納税の義務がある。教科書に書いてあった「日本を担う」大人にならなければならない。だからこそ、税金への理解と関心を高め、税金に感謝し、日本を担う大人になるための努力を、日々していきたいと思う。

㊟ 自分を取り巻く環境の中にある「税金」について思いを巡らし、その仕組みや役割、使い道について考えることができました。だれもが豊かで住みやすい社会を築くためにも、これからも学び続けていって下さい。　野中　ゆみ



「君の膵臓をたべたい」を読んで

三年　渡部　愁羽

自分と似ている、そう感じた。

私は先日、「君の膵臓をたべたい」という本を読んだ。この本は、高校生の志賀春樹がクラスメイトである山内桜良が書いた「共病文庫」という日記を見たことによって始まる。膵臓の病気によって余命だと宣告されていた桜良が病気の事を伝えるのは、家族以外で春樹が初めてだった。学校でも目立たない春樹と人気者の桜良という正反対とも言える二人だったが、この出会いをきっかけに焼肉を食べに行ったり、旅行に行ったりしていくうちに仲良くなっていった。しかし、桜良は病気ではなく以前から世間を騒がせていた通り魔事件に巻き込まれて亡くなってしまう。後に二人はお互い相手に大きく影響を受けていた事が明らかになる。

私がこの本を読んだきっかけは作者にある。この本の作者は住野よるという方だ。私は以前から住野さんの作品を読んでいたため今回も読むことにした。

この本を読んだ時、第一に、自分はどちらかというと桜良より春樹に近いタイプだと感じた。その理由は主に二つある。

まず、春樹の、僕は自分のことを話すのは好きじゃない、という発言からである。私も自分の好きなものや趣味について話すのが苦手だ。春樹は誰も興味が無いだろうことを自意識過剰

に喋りたくないからだと言った。私はこの理由にも共感したが、私が自分のことを話すのが嫌いな一番の理由は、好きなものを否定されたり、けなされたりするのが嫌だからである。私がそのような経験をしたことはほとんどないが好きでいることでだれかに迷惑をかけたり、悲しませたりしているわけではないのに、変だ、気持ちが悪いと言われている人を見ているうちに、自分の事を話すのが怖くなってしまったのだ。

二つ目は、二人が休みの日に一緒にいることを不審に思ったクラスメイトが、春樹が桜良のストーカーだとうわさしている場面での、春樹の心の声だ。それは、（僕は、心底呆れる。どうして彼らは多数派の考えが正しいと信じているのだろうか。きっと彼らは、三十人も集まれば人も平気で殺してしまうのではないか。自分に正当性があると信じてさえいれば、どんなことでもしてしまうのではないか。それが人間性ではなく、機械的なシステムであることにも気づかずに。）というものである。私はこれに深く共感した。実際、ＳＮＳ上のうわさによって犯罪者だと誤解した群衆が、協力し合い罪のない人を殺害したという外国のニュースを見たこともある。人は大勢集まると、自分の考えは正しい、間違っても自分だけの責任にはならないと思い、大胆な行動をしてしまうのかもしれないと思った。しかし同時に、私は今まで自分はそうしたことがないのか、また、これからそうすることがないのか、不安も感じた。いつでも深く考えて行動できる人になりたい、そう思った。これらが、私が春樹との似ていると感じた部分である。

色々な場面で春樹の考えに共感を抱いたが、自分との違いを感じたところもあった。それは周りの目を気にしない強さだ。クラスメイトからの視線や言葉を特に気にせず、一人で行動しているところがすごいなと感じた。

また、自分とは正反対のような性格の桜良の言葉で特に印象に残っているのは、「私も君も、もしかしたら明日死ぬかもしれないのにさ。そういう意味では私も君も変わんないよ、きっと。一日の価値は全部一緒なんだから、何をしたかの差なんかで私の今日の価値は変わらない。」という言葉で、桜良の発言の一部だ。改めて、明日も確実に生きている保証はどこにもないということを実感したとともに、やりたいことはできるうちにやろうという気持ちになった。

また、この小説はストーリーだけでなく、ジョークや言い回しの面白さも魅力だと思う。自分もこんな文章が書けるようになりたいと思った。

私はこの本を読んだことが、人との関わり方や、命について改めて考えるきっかけになったとともに、本の良さを実感することにもなった。これからも色々な本を読んでいきたい。

㊟　書き出しの一行が印象的です。作品の中の人物とどのような点が似ているのかが気になるとともに、この文章を書いた渡部さんの人柄も想像させる一文です。

長谷川　陽子